

● シリーズ 私の見た日本 Vol.222

日本とモンゴルにおける建築の「一時性」と「柔軟性」について

パヤラ マラル



モンゴル・ウランバートル市生まれ。2022京都工芸繊維大学工芸科学部デザイン建築学課程卒業、同年同大学大学院工芸科学研究科建築学専攻(博士前期課程)入学。現在大学院2年生。

来日してから7年目になりますが、時間をかけてしか見えてこない日本の一面を見ることができました。日本での経験は、建築の驚異を超えて、より広い日本の文化や世界観を理解することを可能にし、母国のモンゴルの特性についての深い洞察を提供してくれました。

日本とモンゴルの原風景における建築文化の特性と現代に迎える課題の共通点

まずは、日本の木造建築とモンゴルのゲル(伝統的なテント住居)に見られる建築の一時性について探求したいと思います。定住と移住という異なる生活様式を背景に持ちながらも、建築の永続性に対する共通の視点を持っていることが興味深いです。

木造建築が主流の日本では、建物が経年劣化により解体され、新たに建て替えられる文化が存在します。この文化の代表例として伊勢神宮が挙げられ、20年ごとの再建は、物理的なものの永続性よりも、むしろ継続する精神や文化の重要性を強調しています。ここに見る日本人の建築に対する考え方は、一時的な存在としての建築を受け入れ、それを通じて何か永続するものを見出す文化的価値観を映し出しています。

一方、モンゴルの遊牧民族にとって、ゲルは

移動生活に適した解体と組立が容易な住居であり、仮設的建築のように捉えられています。この移住文化による特性は、建築の一時性という観点で日本の木造建築と比較することができます。移住文化において、建築が恒久的なものではなく、生活の変化に適応し続けるべきものという考え方を示しています。

また、日本文化に根ざす「物事の一時的」という概念は、建築だけでなく、日本人の物事に対する捉え方や価値観にも深い影響を及ぼしています。この価値観は、新しいものを受け入れ、古いものを自然と手放すサイクルを促進し、建築物の寿命が比較的に短いことや、都市風景の迅速な変化現象につながっています。これは、西洋の石造建築と対比することで特に顕著に見ることができ、日本の建築文化が「造っては壊す」サイクルをどのように内包しているかを示しています。

文化によるこのような特性は、日本とモンゴルにおいて建築物の保存という観点から一定の課題を生み出しています。建築物が頻繁に入れ替わることで、都市の景観は絶えず変化し、歴史的な価値を持つ建築物が失われることも少なくありません。これは、西洋における石造建築の保存という概念と対照的であり、建築を長く大切に使う意識の醸成が今後

の課題とされています。

現代都市と建築における「個」と「共」について

ここでは、日本の都市と建築における「個」と「共」の関係性について探りながら、今後の都市における相互作用の中で形成される「共」の可能性について触れたいです。

日本の建築と都市計画の現状を検証しながら、特に個人主義の推進が社会的な相互関係性にどのように影響を及ぼしているかを論じます。

現代都市では、個人のプライベート空間が広域のコミュニティへの帰属感よりも優先される傾向にあります。日本では、都市(アーバン)スケールから建物単体(ビルディング)スケールまで、個人化による他へと開かれた余地のない自閉化が進んでいます。

近代の社会科学は、方法的個人主義という言葉が示すように、個がその基礎的な単位です。この「個」への焦点は、自立性を促進しつつ、共同体意識や「自己」と「他者」の相互依存の感覚を希薄化しています。日本の宅地では、この傾向が顕著に表れており、個々の住宅がそれぞれの敷地に密集して建てられている様子から、強い自閉化の傾向が見て取れます。このような日本のトップダウン方式の宅地開



日本、京都市、宅地開発

モンゴル、ウランバートル市、宅地開発



上/「個」としての自立する
下/「共」として相互作用する

上/アーバンスケール：
宅地に見られる「個」の自立性
下/ビルディングスケール：
片廊下型アパートに見られる「個」の自立性

発は、計画的で統一感がありながらも、地域や個人の特性を反映できず、関係性の複雑さを見落としています。

一方で、モンゴルでは、土地所有法に基づき、ボトムアップ方式での宅地開発が行われています。住民が自分の土地を自由に開発し、相互作用の中で生活空間を形成するプロセスを通じて、有機的なコミュニティの形成を促すことで、「共」、すなわち集まって住むことの新たな可能性を示していると思われま

す。注意すべきなのは、現代社会において「個」の確立が必要不可欠であったという事実を否定するものではありません。個人主義が強調される現代の住環境は、歴史的な経緯を経て今のカタチに至ったわけですが、今後どのような変化が求められるかは課題になっています。

日本では、高齢化や単身世帯の増加という社会的変化に伴い、各人のライフスタイルに大きな変化が生じており、「共生」の概念がこれまで以上に重要視される時代が到来しています。「共」および「集まって住むこと」の概念は新たな意味を帯びつつある今、建築は、「個」と「共」のダイナミックな関係を促進し、支援するための手段としての重要性が再認識されています。近年、建築における「自己」と「他者」、「内」と「外」に対して、「開く」「つなぐ」が重要なコンセプトとして取り上げられています。これは、今までの閉じがちだった建築に対して、外部との関係性を構築するための対策ですが、必ずしも閉じる<開く、個<共という概念にはとどまらないでしょう。

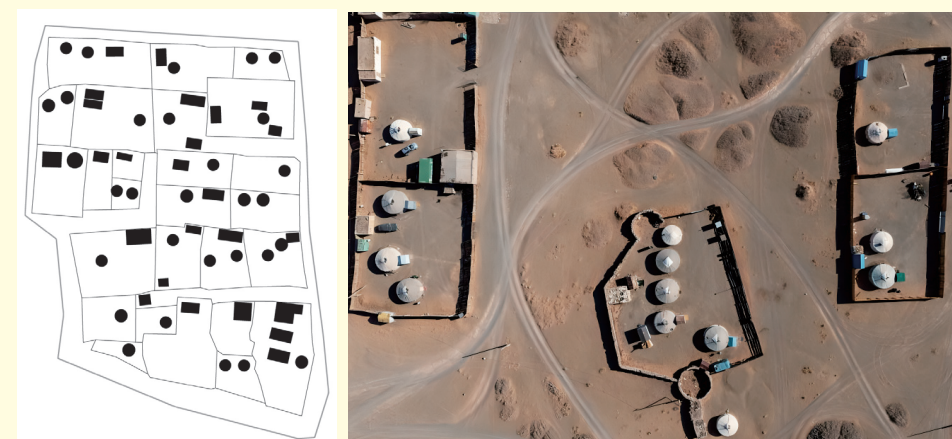
その理由は、硬直的な擬似的空間が一方的

に与えられることで、消費以外のふるまいが許容されないからです。私は社会的相互関係を厳格に規定するのではなく、開くか閉じるかという他者との関わり方に選択肢を与えることが必要だと考えます。従って、建築を通して、質的にも物質的にも柔軟かつ適応能力に富んだ空間を創出することで、充実した社会的関係の構築が可能となるのではないかと。ここで言う柔軟性は、「特定の方向性を持た

ない潜在的な変容能力」を示します。今後、私たちは「個」と「共」という概念の間に存在するダイナミズムを見直し、建築と都市計画における新たな統合的アプローチを模索することが必要です。最終的に、建築は社会の変化に応じて進化し続ける必要があり、それによってのみ、より持続可能で、包容的な未来を築くことができるでしょう。

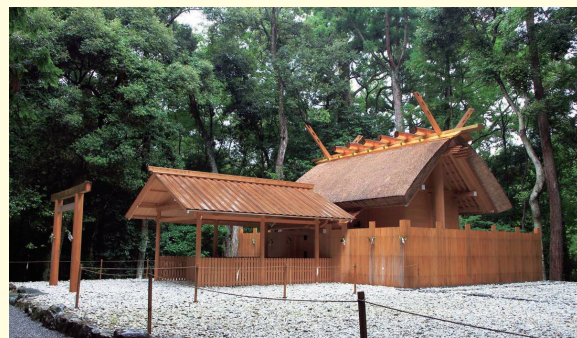


モンゴルの宅地①

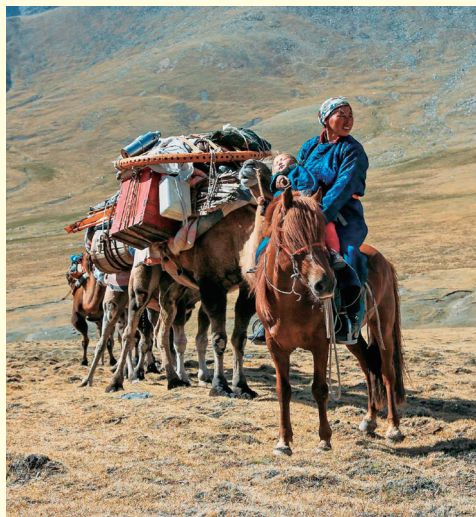


モンゴルの宅地②

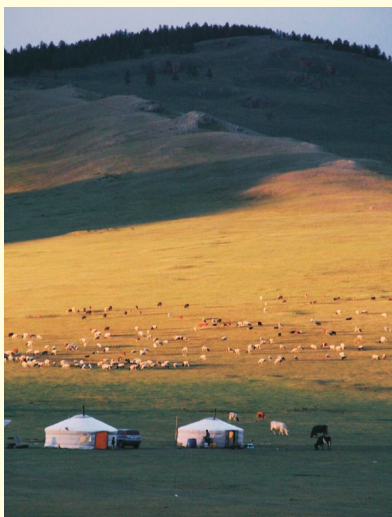
モンゴルの宅地③



上/伊勢神宮 下/遊牧民族の移住住まいのゲル



遊牧民族の移住



遊牧民族の移住住まいのゲル